

〔書評と紹介〕

細井 計編

『南部と奥州道中』（街道の日本史 6）

千葉 一大

忘れられた地域の歴史の掘り起こしにとどまらず、地域に住む人々の暮らしや文化に注目すると共に、様々な交通を通じた他地域との交流にも目を向けて、その地域の歴史をとらえ直そうとする試み（『新たな地域史の創造』）を提唱して刊行が開始された叢書『街道の日本史』は早くも第一期の刊行が終了した。この第一期刊行巻のなかには、長谷川成一氏編の『津軽・松前と海の道』、浪川健治氏編『下北・渡島と津軽海峡』という本県にかかわる地域を対象とした二冊が発刊されており、本誌誌上でもすでに金森正也氏や佐藤一義氏によって紹介と書評がなされているところである（本誌第一一一号・第一一二号）。筆者にとってもこの地域の歴史は自らの研究につながるところも多く、大変興味深く読了したことであつた。また、第一期においては東北地方の他地域にかかわる巻も多く発刊されている。各巻それぞれの地域の歴史に興味のある方の購読を期待するものである。

そのようななかで、第一期の終了直前に細井計氏編による『南部と奥州道中』が刊行された。本書がとりあげるのは、奥羽山脈と北上高地とに挟まれた岩手県の内陸北部から中部にかけての地域である。本県とも

隣接し、深いつながりをもつ地域の歴史を記した一冊だけに、本誌読者のなかにも期待と興味をもたれた方も多かったのではないかと思われる。細井氏については、読者もよくご存じのように今春の退官まで岩手大学教授として地域の歴史研究を牽引してきた方であるし（現岩手大学名誉教授・東北福祉大学教授）、また共同執筆者である高橋信雄岩手県立博物館学芸部長、樋口知志岩手大学助教授、菅野文夫同大学教授、名須川滋男同大学講師、及川和哉岩手県文化財愛護協合理事長という岩手県の歴史研究を代表する面々が、得意な分野をそれぞれ担当し執筆の任に当たっている点も、まことに人をえたという感じがする。

本書の構成は次の通りである。（かつこ内は担当執筆者）

I 南部を歩く（細井）

II 南部の歴史

一 南部の国

- 1 縄文の世界（高橋）
 - 2 最北の前方後円墳（高橋）
 - 3 志波城・徳丹城と蝦夷（樋口）
 - 4 安倍氏と源氏（樋口）
 - 5 平泉と京・鎌倉（菅野）
 - 6 中世南部氏の道（菅野）
 - 7 奥羽仕置と南部信直（細井）
 - 8 九戸合戦と南部信直（細井）
- 二 諸地域社会の形成―近世地域の生業と社会
- 1 盛岡藩（細井）

- 2 城下町盛岡（細井）
 - 3 南部の曲り家（名須川）
 - 4 山の民（名須川）
 - 5 南部鉄と手工業（名須川）
 - 6 襲いくる凶作と飢饉（細井）
 - 7 川のと道と陸のと道（細井）
- 三 南部の近代
- 1 岩手県（名須川）
 - 2 自由民権運動（名須川）
 - 3 小岩井農場（名須川）
 - 4 小繋事件（名須川）
 - 5 岩手の政治家と軍人（細井）
 - 6 戦争戦後の岩手（名須川）
- III 地域文化の成り立ち
- 一 天台寺（及川）
 - 二 盛岡八幡宮（細井）
 - 三 遠野物語の世界（及川）
 - 四 鹿踊りの世界（及川）
 - 五 藩の教学と作人館（細井）
 - 六 地誌・歴史書の編纂（細井）
 - 七 南部の生んだ学者と文人・画家たち（細井）
 - 八 街道を往来する人びと（細井）
 - 九 南部地域の歴史と日本史（細井）

あとがき 参考文献 年表 図版一覧 索引

基本的に本叢書の構成は、まず地域の風土、そして街道にそって注目すべきビューポイントを解説して地域の概観をとらえ、ついで地域の歴史を振り返り、最後に地域の特徴的な文化遺産についての詳説というスタイルで一定しているようである。筆者もこの流れに沿って本書の内容を紹介していきたい。

「I 南部を歩く」では、まず「I 南部の地理と風土」として、この地域の地理と風土における概観の特徴が述べられなければならないが、南部という地域よりも岩手県域の概観に筆が及んでいる。そして「先人たちがみずからの生活を守るために、外部からの権力に対してするどく抵抗した歴史」の地と規定している。ついで「II 奥州道中と脇街道を歩く」では、近世には城下町として、また現在でも政治・経済・文化の中心である盛岡を中心として、地域を南北に貫く奥州道中（三戸く盛岡く金ヶ崎）、脇街道としての遠野街道（盛岡く大迫く遠野）、宮古街道（盛岡く門馬）、「塩の道」・「鉄の道」という別名があり物資運搬道として知られる野田街道（盛岡く早坂峠）、沼宮内廻野田街道（沼宮内く葛巻）、秋田街道（盛岡く栗石く国見峠）、鹿角街道（盛岡く分れく田山）の各街道をとりあげて、その道に沿った史跡や見所などを紹介する。

『東奥日報』紙上に『津軽・松前と海の道』の書評を執筆した本会会員の中園裕氏は、「ちよつと知的な旅の友」という、この叢書の宣伝惹句にも使えるような紹介をしたが、『東奥日報』夕刊、二〇〇一年二月二十二日付）、まさにこの章などはその惹句にあてはまるものである。自家用車をお持ちの方は、この本と道路地図を頼りにこれらの旧街道を

たどれば、地域に埋もれた歴史について新たな発見ができるかもしれない。

「Ⅱ 南部の歴史」は、この地域の歴史が時系列で概説的に述べられる。「Ⅰ 南部の国」では縄文時代から中世末・近世初頭にかけてがとりあげられる。ここで注目すべきは原始・古代・中世の記述の充実振りで、筆者も学ぶ点が多かった。原始・古代については遺跡の発掘などで得られた考古学的知見が多く取り入れられており、また志波城・徳丹城といった古代城柵の設置意義について通説を再検討し、北方エミシ社会との関連性も十分意識した記述となっている。また前九年の役の立役者である安倍氏についても陸奥国在庁官人筆頭としての性格や台頭の背景について興味深い説が提示されている。

この『街道の日本史』という本の趣旨をこの巻でもっともよく理解して書かれたと思われるのが中世に関する記述である。平泉と京との間に奥大道、太平洋岸、日本海側という三つのルートがあり、その文化の形成には情報収集や物資の往復などで道が深い役割をもっていたことを指摘し、また中世に登場した南部氏が京都に上洛したルートを検証し、主要な産物であった馬を媒介とする室町幕府との関係に道が果たした役割、さらに最近入間田宣夫氏らによって主張されている南部氏と海の世界の関連について紹介するなど、人々の行き来とものの交流という側面を強く意識した記述が大変斬新である。

「Ⅰ 南部の国」の末尾から「Ⅱ 諸地域社会の形成―近世地域の生業と社会」にかけてが近世に関する記述となっている。まず盛岡藩の成立と展開について概略的に述べたあと、城下町盛岡の発達、盛岡藩の特

色ともなっている飢饉と一揆についてという時間的流れとあわせて、山村の人々の暮らしや林業・鉄・諸々の手工業について述べるという形式をとり、最後に北上川舟運や「塩の道」「鉄の道」といった内陸地域への物資運搬の道について述べている。

「Ⅲ 南部の近代」においては、幕末の盛岡藩内派閥抗争から、戊辰戦争を経て岩手県成立過程がまず述べられ、そのあとはトピック的に東北の中心をなした岩手県の自由民権運動、地域産業発展のための大規模農場である小岩井農場、入会権闘争、近代日本の動向に影響を与えた地域出身の政治家と軍人たちが描かれ、最後に昭和恐慌・昭和犬作の影響を直接受けた時代から、馬産・木炭など岩手県が全国第一位の生産を誇っていた産業などを通じて、戦中戦後の岩手県を眺めている。

「Ⅲ 地域文化の成り立ち」では、いくつかの個別的なテーマをとりあげてこの地域の文化がどうはぐくまれてきたかを、具体的にみようという試みがなされている。一部で地域史というより新聞のルポルタージュ的な記事になっている点があり少々気になるが、盛岡八幡宮の成立と祭礼の記述などは史料に具体的にもとづいており、『盛岡藩雜書』（熊谷印刷出版部より刊行中）の責任校訂に当たっている細井氏ならではの記述であるように感じられたし、宮沢賢治、石川啄木らをはじめとするこの地域が生んだ多くの文化人、「民話の里」遠野、民俗芸能である鹿踊りなどをとりあげ、南部を訪れた旅人たちの記録を追いつながら、この地域の江戸時代の姿を具体的に描こうとし、この地域が担った歴史的意義を指摘しつつ本書全体の記述が結ばれる。

以上、駆け足でこの本の内容をみてきたが、この地域の概略的な歴史

や刻まれた特徴を紹介したこの本は、いわば「地域の名刺」代わりとして読むことが可能であろう。

ここで、読み終わつての筆者の個人的感想をいくつか述べておきたい。この叢書が主張する「地域史」の概念は、藩や県、郡、市町村といった行政区分による従来の視点とは異なつて、地域の人々の生産と生活、文化を通して地域の姿を明らかにする試みであり、金森氏が本誌第一一一号で指摘しているように、既存の歴史記述から脱した構想や記述が求められている。それにこの本がどれだけ答えているかという点が大きな問題点として挙げられよう。筆者が感じたのは、奥州道中に沿つた南部地域の歴史というよりは、たとえば冒頭の地域紹介の箇所が本巻の範囲を飛び出して岩手県全域の紹介となつてしまつたり、近世史や近代史の記述に見受けられた点だが、「盛岡藩」や「岩手県」といったそれぞれの時代の行政組織・区画の成立について力を入れて述べる点が比較的多かつたような気がする。その点からすれば、残念ながら本叢書が掲げた「地域史の創造」という観点から時折はズレてしまつたのではないだろうか。

地域間の交流という点においても、たとえば近世における領内交通のうごきは大変よく理解できたし、旅人の目からみた盛岡領についてとりあげるなどの工夫はみられるが、深い交流があつたはずの隣接地域とのつながりに関する記述が少ないのは惜しまれる。たとえば、この地域と蝦夷地との交流は、警衛に民衆の動員が行われたり、海を越えて渡つてきた細工物が藩による風俗統制の対象になつたりと多彩である。また、城下町盛岡の発展に伴つて移住してきた近江商人たちなどの動きもある。

通りすがりの一過性の視点だけではなく、地域にとけ込んでいったものや人の流れについてもより多くの記述ができたのではないだろうか。近現代においても、鉄道の開通や道路の発達など、交通の果たした役割について、なんらかの記述が必要だったのではないか。

文化的側面の記述でも、より地域に根ざした側面をとりあげたいのであれば、たとえば風俗や伝統行事、生活といったより地域の人々に密着した民俗学的な視点からの記述がより多くあつてもよかつたように思われる。

近世史・近代史の記述のなかには、内容的に筆者のこれまでの管見でも目にしたものが多く、近年の新たな研究成果を取り入れるに至っていない点もあつたように見受けられる。たとえば盛岡城の築城開始年代については、根拠となる南部信直書状に他の解釈も提示されている(『青森県史 資料編近世1 近世北奥の成立と北方世界』青森県、二〇〇一年、九二頁)。また幕末の盛岡藩における政争を、「藩政を改革し体制を立て直そうとする改革派」と「依然として古い組織と利権を守ろうとする保守頑迷の守旧派」という最近の新聞の政治面でよくみかけるような定義で単純化してしまつてよいものだろうか。派閥わけしようにも内実により複雑なもので、こういった図式をあてはめることが難しいことは、すでに盛岡藩の藩政改革の研究のうえで述べられている点である(岩本由輝「盛岡藩における幕末藩政改革(一)」『山形大学紀要(社会科学)』二二―、一九八一年)。最近の北海道・東北史の研究の進展はめざましいものがあり、従来唱えられて歴史の常識となつていた点を覆し、旧来の学説に再検討や書き換えを迫るような動きもある。新しく唱えら

れたものがすべて正しいということではまったくないが、すでに学界では先行研究ともなっている点になんらかの配慮・対応した記述をなおいっそう心懸けて欲しかった。

とはいえ、筆者がこれまで述べた感想は取り組んでみれば難しい問題であろうし、ない物ねだりという点も多く、筆者の視点の誤りや、検討の不足などもあるかとも思われる。その点は執筆者、読者諸氏にお詫び申し上げておきたい。本書はこの地域の歴史と史跡・文化財などを知りたいという読者にとつては、その入門編の一冊ともなりうる本であることはいままでもないことであり、地域というもののあり方に注がれる目が熱い今だからこそ、この地域を知る手がかりとして一読をお薦めしたい。また引き続き刊行される第二期刊行の各巻にも大きな期待を寄せたいと思う。

(四六判、二四四頁、吉川弘文館、二〇〇二年五月刊、二三〇〇円)

(ちば・いちだい 青山学院大学大学院科目等履修生)